

## それぞれの社会詠 屋良健一郎

「現代短歌」八月号の特集は、「[テロ等準備罪]」を詠む。「[テロ等準備罪]」新設法が成立した前後に詠まれた五十七名の作品が並ぶ。通常の形式での依頼に加えてFacebookでも作品を募集した点、「編集後記」が物語風となつていて、毎月の「編集後記」とは異なり旧仮名で記されていることでフイクションだということを感じ取れる)も合わせて、力の入った特集だと感じた。特に印象的だった歌を紹介したい(日付や詞書が付された歌もあるが、ここでは割愛した)。

・めいめいがストローに赤き液を吸ひ互みに思ふ密告のこと

高野公彦

ファーストフード店やカフェでジュースを飲んでいる場面を想像する。ジュースの名前を具体的に記すのではなく、「赤き液」とした点がポイント。この無名性が、相手を警戒する余り目の前のジュースに意識がいかない様子や、いつ誰に密告されるか分からぬ不気味な社会の到来を予感させる。

・ばら園のベンチの下に落ちていた百二十一枚の青票

土岐友浩

「百二十一枚の青票」は、衆議院本会議で法案に投じられた反対票のことである。国会にあるはずの青票が時空を越えてバラ園に落ちている。非現実的な歌だが、テレビの向こうのものを眼前に現に出現させ、ベンチの下という絶妙な場を設定したこと、時空を

歪めて青票を飛ばすことができそうな圧倒的な権力者の存在と、反対する人々の無力・無念がリアルに伝わる歌になつた。

・町内の監視カメラが二台増えこのごろ通らぬサンダルのひと

小黒世茂

・うたかいに共謀罪のうたのでて格助詞のみを言ひて黙せり

藤島秀憲

・法律ひとつ増えて風止むこの夕べ雲になる前の雲を見ている

小島なお

小黒作、「サンダルのひと」を見かけなくなつたのはなぜだろう。

監視カメラが増え、サンダルで外出するのが恥ずかしくなつただけかもしれないが、あるいは何か事件に関与したり巻き込まれたりしたのか。監視カメラは安全・防犯のためのものだが、下句があることで、高野の歌同様、監視社会の不気味さを感じさせる歌ともなつてゐる。藤島作、「黙せり」は必ずしもノンボリといふことを意味していないように思う。あくまで歌会だからではないか。

社会詠の内容ではなく格助詞(歌の技術)にこだわる姿勢。小島作、「法律ひとつ増えて」は冷めた言い方だが、それが下句と合っている。薄く小さな雲のように、この法律にはまだ具体的に分からぬことが多い。しかし、雲がだんだん大きくなつていくようにな、この法がやがて存在感を増す日が来るだろう。そういう思索や不安を感じさせる一首。社会詠ではストレートに声高に賛成、反対を叫ぶのも大事だとは思うが、これら三首のように生活に根ざした歌のほうが質感に富み、大きな問題を身近なものとして読者に実感させる力を持つてゐるようだ。

表現の優れた歌、非現実的な歌、生活感のある歌。社会詠、時事詠を詠む上でのヒントがあるように感じた特集だ。